



私は、  
この学校に育って、  
ほんとうに  
よかった。

こがね色やあかね色が街を覆うころ、小学校6年女子の皆さんにとって受験勉強もラストステージです。窓外に寒風が舞っても来冬は未来への門。殊勝に学習に努めているでしょう。心からねぎらってあげましょう。

あたたかい食卓を囲み、未来の学校生活を話題にことばを交わす生活であればうれしく思います。目の前に座る少女は、何を願っているでしょうか。何に案じているでしょうか。そして、どのような成長を描いているでしょうか。志願校を定める季節。今一度、その目を見つめ、真の願い事確かめてください。

真意が見て取れるでしょうか。

彼女たちは自分の色が鮮やかに輝く日を待ち望んでいます。でも、均質な目標を指さしてしまうから、目の光が失せてしまいます。「こうなりなさい!」と押しつけてしまうから、顔の色が褪せてしまいます。子どもたちはまず、自分をありのままを受容されたいのです。逆に、「あなたはこの程度で十分よ」では、「私は期待されていない」と寂しくうつむきます。自分らしく未来へ挑む勇気を授かりたいのです。

願いが叶えば、私は自分のエネルギーで伸びる。そう約束してくれるはずです。

受験勉強に浸ると、入試偏差値による学校の序列が支配します。「ランキング表」とにらめっこ。1ミリでも上部に並ぶ学校に合格するのが使命かのように思い詰めてしまいます。それも親心。そして、ご本人も期待に応えたいと願うでしょう。しかしながら、賢明なご家庭の皆さんは心の内で心がけているはず。ランキング表は、入学試験の指針にすぎません。成長の場を見定める尺度は子どもたちの真意。そして真意を受け止める保護者の愛情です。それが、教育を選ぶ本道です。

女子聖学院は、教育の根源的な観点をよみがえられて選んでほしい学校。いや、すでに、女子たちの意中に応じ、成長を託されている学校だと信じます。

いくつかの「枠」を机上に並べ、さあ、あなたはどの枠がいいの?と問われても、子どもたちは迷うだけ。私は隣席の友人とも違うカラーが彩っているのに、無理やり上塗りされてしまうかも。まるで機械を組み立てる工場のような場に送られるのを恐れます。矢継ぎ早に部品が組み込まれるような道のりを拒みます。

教えれば伸びる。しつければ整う。今の学校教育には独りよがりな機能論も散見されます。それは、まぶしいサーチライトで照らし、毒々しい化学肥料を流し込む教育ではないだろうか。心配です。さあ、素晴らしいシステムで教えてあげる、数々のルールでしつけてあげる、と招かれても子どもたちは力んで身構えるだけです。

うらかな日向を描いてください。子どもたちは草原の花々、森の木々と同じです。肥沃に耕された大地に健やかな環境を整えば、引っ張り出さなくとも小さな種から芽吹き、すくすくと光に向かいます。子どもたちは、自力で「気づく心」を備えています。友人や先生と親密にかかわりながら、おのずから学びます。正しい道を見つけて喜々と歓声をあげるのも、壁を乗り越えて両手を空に伸ばすのも、自分の力が源です。

がんばれ!! 負けるな!! と引きずる教導は女子聖学院のシーンに不似合いです。内からわきでる成長力に望みをかけます。日々の成果を称え、愛情を示すために声をかけます。たとえ立ち止まってしまっても、心にかけられていると実感していれば、やがて勇気が注がれ前へ踏みだします。生徒たちは、ゆっくり時間をかけて力をたたえます。

草原にも森にも嵐が見舞います。保護者の方も12歳から18歳のころを思い起こしてみましょ。誰だって悩み悲しんだでしょう。壁に怯み、道に迷ったでしょう。人は心をもった存在だからです。いわんや子どもたちの心はイノセントでナイーブ。機械的な教育が子どもたちの心を救うでしょうか?

女子聖学院では、毎朝の礼拝で祈ります。感謝の気持ちを賛美歌に込めます。かけがえのない私を受け入れられる。自分の存在を確かめます。それが彼女たちを照らす光。光の中にあつて、先生は大上段に押しつけず、耳を傾けます。手を差し出し支えるように助言を授けます。女子聖学院は、あたたかい包容力で自然な成長力を見守る学校と描写するべきでしょう。

朝7時30分から夕方5時30分まで進路自習室を開いています。毎日、生徒たちが集います。

女子聖学院では、大学合格実績が伸びています。これからは躍進が確信されています。「お姉さん」の成果は「妹たち」にとっても誇り。私にもきっとできる。そう、信じ勇気がみなぎります。学習指導力を磨くのは、先生たちの当然の使命。細やかな授業。手厚い支援。日々献身します。生徒たちは応えます。実りはより豊かに輝くでしょう。

高校生が、先生に向かって訴えました。「私たちに休めは要りません。夏も女子聖学院の教室で学びたい!」下級生も同じくリクエストを重ねました。先生たちは応えます。2011年度は150コマ、述べ450時間の補習授業を開講しました。私たちはがんばった! 猛暑の夏が生涯の思い出となったでしょう。競争をあおり、勝利を求める教育は本意です。女子だけの場で共感を紡ぎ、力を合わせて高まるのが女子のコミュニティ。女子聖学院には女子校の美風も色濃く宿ります。

誤解しないでほしい。進学指導の「高機能化」「効率化」が目的ではありません。システムでもプログラムでもない。彼女たちを導くのは、女子聖学院の生活すべてです。

大人たちの心も洗われるかのよう。誰もが心を打たれる清らかな学校です。教室を見渡してみましょ。あどけない中学1年生であれば、ほほえましく映るでしょうか。色とりどりの個性が並んでいます。「かぐわしき、花のかおり、園にみちて」と校歌に歌われる学院。その詩句にふさわしく、それぞれが異なる花々を咲かせ、実ります。

彼女たちは厳しい規則で縛られているわけではありません。学校行事などのさまざまな場面で見せるはつらつとした表情も素顔です。守られる生活だからこそ、ほんとうの自由を享受しているのです。そうして心を養っているのです。心は、数式のように黒板に書き示して教え込むものでしょうか。黙々と走り込んで鍛えるものでしょうか。思慮深く慈愛を注ぎ込み、子どもたちの胸の内を満足で満たす。やがて、心に品格をまとい、心に力がみなぎります。

私たちは女子聖学院に育って、ほんとうによかった。女子聖学院を巣立つ女性たちは、ほっと力を抜いて語ります。「教育された」のではない。「成長が導かれた」と振り返ります。

6年間、清浄な礼拝堂で生徒たちが向きあつた「Love God And Serve His People」の碑文。神様から与えられた今日という日に、あなたは自分のために、あるいは人のために、何をされるのでしょうか。礼拝堂を後に社会に歩み出した後、きっと生涯、心の中に刻まれているでしょう。

日本のミッションスクールを代表する屈指の伝統校はミッションに忠実です。「特進クラス」など、あらかじめ生徒を選別するような姿勢は排除します。だからこそ、幅広い学力の生徒が並んでも、個々のポテンシャルを生かす学習指導力を鍛えました。それが女子聖学院の神髄です。将来の進路の限りは絶対にありません。勉強に遅れて、はじかれてしまう場面は想像もできません。女子聖学院の精神・気風に共鳴するのであれば、入試難易度の序列を超え、清らかな心持ちで歩んでください。

時代が求める改革にも手を休めません。100年以上の歴史を経て築かれた学校です。改革を積み重ねても基盤は強固。信念は不動です。キリスト教の教えを礎とする「人間教育プログラム」が6年間の幹。聖書の導きはいつの世にも不変。学校は揺るがない。先生たちの志も結集。だから生徒たちの心も安らかです。

